

# — 上智大学 —

2月7日 経済学部 国語

## 解答

目

問一 b 問二 c 問三 d 問四 a 問五 b  
問六 b 問七 a 問八 d 問九 a 問十 c

目

問一 a 問二 a 問三 b 問四 d 問五 d  
問六 c 問七 1 a 2 b 問八 b 問九 X a Y b Z b

目

問一 d 問二 a 問三 b 問四 c 問五 b  
問六 a 問七 d 問八 c、e

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

[増田塾 2019 解答速報ホームページ](#)



早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！

**解説**

※説明の際は本文全体を通しての行数で「○行目」というように説明箇所を示していく。この大問  本文は全 67 行となっている。

- 問一 傍線部 1「〈書き言葉〉の意味」は 7～12 行目に書かれている。「何度もくり返して写すことができる」(7、8 行目)、「どこまでも広まる」(9 行目)、「解釈が書き足され、人類の叡智が蓄積される」(10、11 行目)等である。さらに傍線部 1 に「たんに物理的に残るというだけでは意味がない」とあるので「物理的に残った状態(=マイナス)」の説明が 4～7 行目 ロゼッタ・ストーン の例で説明されている点も押さえる。とすれば「物理的に残るだけ=多くの人を読めない」ということだから、「〈書き言葉〉の意味(=プラス)」は「多くの人を読める」ということになる。よって正解は b である。a は一見良さそうに見えるが「徐々に変化して」が本文に書かれていない内容なので x。c は「媒体の発明」に焦点化してしまっているので x、d も書かれている内容が「読まれる」ことに全く言及していない点で x。
- 問二 語彙の問題。「幾何級数的」の意味は「前に数倍する勢いで増大・変化し続けるさま」。よって正解は c である。
- 問三 傍線部 3 の「〈書き言葉〉の歴史」は 24 行目「それは、人類の歴史を見れば～」以降に、「そのような機能」の指示内容は 16～21 行目に書かれている。つまり「一つの共通した〈書き言葉〉によって人類の叡智が蓄積される」(=「機能」)、「〈書き言葉〉は原型となる文字が変化してできた」(=歴史)の 2 点をふまえて判断すれば良い。この内容に最も近いのは d で、これが正解。a は「数学」を使って説明しているが、「数学」はあくまで「例」「たとえ」にすぎず部分的、不十分で d より劣るので x。b は「一つの〈書き言葉〉を求める」が 25 行目に反するので x。「求める」のではなく「一つの原型が変化してきた」のである。c は「さまざまな〈書き言葉〉が～発達してきた」が 25、26 行目に矛盾するので x。本文では「世界にあるさまざまな文字」は「原型となる文字が変化してできた」と言っているものであり、c とは意味が異なる。
- 問四 傍線部 4 の「歴史的」は、問三でも触れた通り 24 行目以降に書かれている。「文字というものが、そうかんたんに生まれるものではない」「原型となる文字が変化してできた」という部分である。さらに傍線部「外の言葉」は 34 行目以降で説明されている。「外から伝来」「二重言語者」、さらに 37～39 行目を見れば「別の言語が入ってくる」ということだと分かる。この内容に最も近いのは a でこれが正解。b は「文化というものは偉大な文明からその周辺へと伝わっていく」が、d は「たいていの言語において～本質的に異なっている」が、それぞれ本文に書かれていない内容で x、c「交易の記録や呪術的なもの」は 37～39 行目の例に書かれてはいるが、あくまで「例」にすぎず、これらに限定して述べてしまっただけは部分的で狭く不十分なため x。

- 問五 傍線部 5「二重言語者」の説明は 43～58 行目に書かれている。その中でも 44 行目、49 行目、51 行目、55 行目に 4 回繰り返されている通り、「二重言語者」は「〈書き言葉〉で書かれた図書館へと出入りできる」人である。そしてその「図書館に出入りすること」は「すなわち、読むという行為」なのであり、「読むという行為」は「〈普遍語〉を読むということ」なのである(55、56 行目)。この内容に最も近いのは b で、これが正解。「潜在的に多くの書物に接近可能」は 47～49 行目に書かれている通り、「図書館」の説明として正しい。a は「二重」の内容を「〈話し言葉〉と〈書き言葉〉」としている点で×。「往復」も、再び「〈話し言葉〉」に戻ってしまうことになり、この点でも誤り。c は「背後にある思想を理解」「文化の発展に貢献」が本文に書かれていない内容で×、d は「図書館」に該当する言葉や、同じ意味になる表現が使われていないので×。
- 問六 傍線部 6「ふつうの宝物とはちがう」とは、傍線部 6 直後 41、42 行目にあるように「モノ」そのものとしての価値(=「金の箱」の価値、ふつうの宝物の価値)ではなく、「読むという行為」にその「本質」がある、ということである。この内容に最も近いのは b で、これが正解。a は「読むという行為」に触れていないので b よりも劣り×、c は「地域に叡智をもたらす」が、d は「技能を発達させる」がともに本文に書かれていない内容で×。
- 問七 傍線部 7 を「限り」「強いた」(どちらも、必然、因果関係を示す)という表現からどういうことか読み取ると、「叡智を求めるには、母語以外に、〈書き言葉〉(=〈普遍語〉)が読める人=二重言語者でなければならない」ということである。この内容に最も近いのは a で、これが正解。b は「二重」の意味を「〈話し言葉〉と〈書き言葉〉」としている点で×、c は「母語を表現する〈書き言葉〉の他に」が本文に書かれていない内容なので×。d は「さまざまな言語の〈書き言葉〉を操る」が×。「二重言語者」が出入りする「図書館」は「蓄積された書物の総体」(46 行目)ではあるが、それが「さまざまな言語」で書かれたかどうかまでは言及されていない。
- 問八 空欄 8 直前に「〈話し言葉〉とは異なった」とあるのだから、空欄 8 は「〈話し言葉〉」の反対のものである。さらに 66 行目に「それは〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を書き表すものだという、のちに生まれた考え方を過去に投影したものの言い方」とあるのだから「〈話し言葉〉とは異なった 8 で書かれている」=(投影)=「〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を表す」ということになり、空欄 8 に入るのは「〈書き言葉〉」=「文語」である。よって正解は d である。
- 問九 a の内容は 29～32 行目にあるが、「より正確な言い方をすれば」以降に「たんに文字が伝来するからではない」とあり、次の文にも言い換えとして、「その文字とやらを使って〈自分たちの言葉〉を書いてみよう、などといって文字文化の仲間入りをするわけではない」とある。したがって正解は a である。b は 47～49 行目にあるが、「さまざまな〈書き言葉〉で書かれた書物」とは読み取れないので×。c「数学」の例は 19～21 行目にあるが、そこには c にあるような「数学的真理を表現」という表記、内容はないので×。d の内容は 64～67 行目に書かれているが、d のような「人類の叡智の蓄積が高度に進んだため」という理由は書かれていないので×。選択肢 a の文意が読み取りづらく難問になっている。

問十 a は 4～7 行目と矛盾するので×。a のように、単に「後世に残るといふ〈書き言葉〉の特質」としてしまふとロゼッタストーンの例にあるような「物理的に残る」という意味になってしまう。b は後半「他方～衰退させる」が本文に書かれていない内容で×。c は 19～21 行目にほぼそのまま書かれており、これが正解。d は後半「文明は人々の間に不平等を生む」が本文に書かれていない内容で×。

□

問一 「不易」は、いつまでも変わらないこと・不変。善悪是非の判断をする際の基準が、一つに決まっていゝて変わることはない道理によるものなのか、それとも絶対の基準はなく相対的なものなのか...を論じようとしている。

問二 「然(しか)する」は、そうする。「非(あら)ざる」は打消。「如(ごと)し」は、ようだ。前問(問一)との関連になるが、善悪是非の判断は、一つに決まっている不変の道理によるというわけでもない(つまりは相対的なものである)と述べ、続く文章でその例を挙げているのである。

問三 耶蘇教(キリスト教のこと)が、かつては猶太国における邪教であったり、仏教もはじめは印度(インド)で受け容れられず放逐されたものであったり...というのは、信仰・宗教の類も、時代・場所の違いで是非の評価が変わってしまうこと、つまり「一定不易」ではないことの例になっている。

問四 「世界の広き」の「広き」は連体形で、下に「こと」などが補える。傍線部 4 を多少前後の文脈を補って口語に直せば「世界が広いことや、近代文明化の程度が進んでいたりそうでなかったりまちまちであることを考えれば、今なお世界には人肉を食らったり老人を生き埋めにしたりすることを是とする国がないとも断言できない(そういう国だってまだあるかもしれない)」といったところとなるろう。「世界の広き」は「仍ほ」以下の判断の前提となっている。これを説明した d に特にキズはなく、これが正解となる。以下それ以外の選択肢を検討すると、a は「過去のことであつて」が誤り。傍線部 4 は現在・現代について言っている。b は波線部 b についての説明自体が間違っている。「可き」は「べき」とよみ、助動詞である。c は波線部 c についての説明はあっているが、傍線部 4 において「世界の広き」は「なし」の主語ではない。

問五 傍線部 5 直前の「斯(か)くは述(のぶ)るものの(=このようには述べるものの)」の指示語「斯く」が指すものは直前の和歌ではなく、ここまでの本文全体のことである(そもそも和歌だったら「詠(よ)む」であり「述ぶ」とは表現しない)。さらに、この文章(新体詩抄の序文である)の目的のようなものを考えてみればわかる。世の中のこと...から話をおこしてみたものの、別にそれそのものを解決しようという意図でこのようなことを論じたわけではなく、傍線部 5 にいたるまでの文章はすべて、なぜ私たちはこの詩抄を編み世に出そうと思ったのか...につなげるための一種の「前フリ」に近いものだったと言える。

問六 a「これまで敢えて創作の必要がなかった」b「これまで...詩歌の創作が少なかった」はともに、これまで(=明治以前)にも我が国(=日本)に漢詩・和歌の伝統があったことを考えれば誤り。「少なきを嘆じ」は「少なかったのを残念に思っ」て」。dは「少なくない」も「感動して」も誤り。

問七 1=P「唾棄せん事」の「ん」は、婉曲の意味をもつ助動詞(「ん」は「む」に同じ)。否定と言える要素は何もなく P は肯定。Q「至らざらん事」は「ざらん」の部分が否定である(打消の助動詞ず未然形)。aかcとなるがcは「至らないとも限るまい」が二重否定になっており語義的に間違い(なお次の2で解説するが「安ぞ知らん」とあわせるときはじめてそのニュアンスになるのであって「至らざらん事」単独ではその意味になっていない)。2=「安(いづくん)ぞ知らん」は「どうして知るだろうか(いや、知らない)」という反語で、これが肯定となったり否定となったり、あるいは謙遜となったり自負となったり...は、語義の問題ではなく、文脈による。まず P の直前を見れば、新体詩抄の編者たちは、この書を世に出すことを「心に嘉(よし)」としているのである。これを P 以下の文と逆接の「ども」でつないでいるのだから「私たちはよいと思っていますが、世の人々がこれを唾棄するかは私たちの知るところではありません(=唾棄するかもしれませんがね)」といった内容。唾棄は積極的にではないにせよ肯定されているし、これは謙遜である。次に Q の直前を見れば「今世の人に容れられざるも」と、まだ世の人々には受け容れられていないけれども...という逆接になっている。ということは、この先・未来・将来に「受け容れられる」ようになることや、何か(新体詩抄の編者たちにとって)プラスのことを言うのではないかと予測できそうである。Q そのものの語義的解釈は1の解説で示したが、これを「安ぞ知らん」とあわせると「どうして、至らないかもしれないと知ることができるだろうか(いや、そんなふうには決めつけることはできない。至らないとも限るまい)」となり、これは私たち(=新体詩抄の編者たち)が「人を感動させるに至る」こともあろう...という自負と言える。

問八 古今和歌集の仮名序(かなじょ)より。「力をも入れずしてあめつちを動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ男(をとこ)女(をむな)の仲をもやはらげ猛きもののふの心をも慰むるは歌なり(力も入れないで天地を動かし、目に見えない鬼神ですらしみじみと感動させ、男女の仲も和らげ、勇ましい武士の心でも慰める。それが歌なのです)」

問九 Yにある「世道の衰頹を憂ひて之を挽回せんとす」は傍線部5に含まれているが、これはそもそも新体詩抄の編者たちは企図していないと言っている(=問五解説参照)。Z「与に善悪是非を語る可からず」は文前半の社会の分析のようなことをしていた箇所であり、特に詩について述べたものではなく、YとZはともにbときまる。問題となるのはXだけで、新体詩抄の編者たちがいう「平常の語」がどのレベルを指すのか、テニソンの詩全体を見て判断する必要がありそうである。まず文語がつかわれており、七五調でもあり(現代の私たちの目から見れば、あまり日常の言葉とも思えないが...)、どうやら新体詩抄の編者たちが言う「平常の語」とはそこを指しているのではないようである。次に着目したいのは2行目「きらきらきらと」や6行目「むらむらばつと」などの擬音語・擬態語である。これならば、それまでの伝統的な日本の詩歌との違いと言えそうである。「たぢたちと」程度なら古文で見たこともある気が...と感じる人もいるかもしれないが、それはたとえば軍記



物などの口承文芸に近いものであって、やはり伝統的な日本の詩歌の言葉とは相容れないと言えよう。よって X のみ a となる。

### 三

※説明の際は本文全体を通しての行数で「○行目」というように説明箇所を示していく。この大問三本文は全 55 行となっている。

問一 傍線部 1 は 1 行目より「必要なものが十分あるとは、必要なものが必要な分しかない」ということである。そして「十分にあれば、人は～生きてはいける」(1 行目)のである。しかし「十二分ではない」と言っている。その理由は 3～9 行目で説明されている。「アクシデント」があると「必要のラインを下回ってしまう」(3、4 行目)ので、「豊かさからはほど遠い状態」(6 行目)だからである。この内容に最も近いのは d で、これが正解。a「可変的であり」、b「錯覚で」、c「動かすことのできないもの」はいずれも本文に書かれていない内容で×。

問二 まず傍線部 2 は「浪費」の説明であることをおさえる。そして「浪費」の説明は 14～24 行目にある。その部分と各選択肢を比べていく。a の「『未開人』の祭り」は 23 行目にある。そして、「支出」は 18 行目にあり、使われ方は正しい。したがって正解は a である。b は「限界を超えて吸収する」が 19 行目「限界がある」に矛盾するので×。c は「豊かさをもはや感じ取ることができない限界まで」が×。本文 19 行目に、「身体的な限界を超えて」浪費はできず「浪費は～限界に達する」とあるが、限界は浪費や食べることに對して来るものであり、本文からは「豊かさをもはや感じ取ることができない限界」は読み取れない。d は「浪費」の説明なのに「限界を超えて豊かさを求めることが可能」としている点が 19 行目に矛盾しており×。後半の「矛盾を内部に含む」も本文に書かれていない内容であり不適。

問三 傍線部 3「観念論的な行為」とは直前の 31 行目より「物を受け取ったり～する」のではなく、「物に付与された観念や意味を消費する」ことである。つまり、「具体物」を手にしたたり吸収したりするのではなく、「意味(=記号)」を消費することである。よって傍線部に該当しないのは「具体的な食べ物を実際に食べている(=吸収している)」b であり、これが正解。他の 3 つは 38～43 行目の「グルメブーム」(=「消費」の例)に該当する内容なので正解にはならない。

問四 空欄 X 直前 41、42 行目に「また別の店が紹介される。またその店にも行かなければならない」とある。39 行目にも「『あの店に行ったよ』と言うため」と書かれている。そういう人が「嫌がる」(42 行目)内容が空欄 X なのだから、その内容は「その店には行っていないの？」であるはず。よって正解は c である。

問五 傍線部 4 は直前の 44、45 行目をふまえて説明すれば「消費は、具体物を受け取るのではなく、記号としての観念や意味を受けとっている」ということである。この内容に最も近いのは b であり、これが正解。a は「消費は～限界に達して止まるタイミングが、～遅くなる」が 28 行目「限界がない」、45 行目「終わらない」に反するので×。c は「常に新しいものでなくては」が本文に書かれていない内容なので×。d は、「記号～介在させた形を取る」としても、結局は「物を受け取る」という意味になり、傍線部そのものに反するので×。

問六 傍線部 5 の説明は 49～55 行目に書かれている。その部分と各選択肢を比べていく。a の「自分の内部～ではなく、外部の状況から～意識させられる」が 49、50 行目に書かれており正しい。a が正解。b は「内実の伴った」が 52 行目「『個性』がいったい何なのかがだれにも分からない」と矛盾するし、文末の「実現させている」も 54 行目「成功しない」「到達点がない」に反するので×。c は「もともとあった『個性』化の願望」が本文に書かれていない内容だし、「主体的に実践」も 49、50 行目より×。d は「自分の内発的な欲求と折り合いをつけながら」がやはり本文に書かれていない内容なので×。

問七 傍線部 6 の理由は 53 行目「つまり、消費によって『個性』を追いもとめるとき～」以降に書かれている。「満足に到達することがない」「成功しない」「到達点がないにもかかわらず～到達することがもとめられる」という部分である。これらの内容に最も近いのは d で、これが正解。a「消費が『成功しない』原理の存在を示唆する」が本文に説明されていない内容なので×。b は「選択の自由」が「存在しない」という別の話になっているので×。c は「消費が消費たりえない」が×。本文では、内発的ではない「個性」に煽られて消費者が「個性」を求めること(=c 選択肢)を「消費」だ、と言っているのだから、それを「消費たりえない」と否定するのは誤り。

問八 a は文末の「強要から逃れられる」が×。ボードリヤールの説明は 14、32、49 行目にそれぞれ書かれているが「強要から逃れられる」という説明はされていない。b は「人が生きていくためには」が×。正確には 8、9、18 行目にある通り「人が豊かに生きるためには」である(b は「豊かに」が抜けている)。c は 27、28 行目、また 30～32 行目と一致する内容で正しい。正解の一つは c である。d は 47、48 行目と真逆の内容なので×。e は 38 行目からのグルメブームの例を参照する。e の「選択しない自由が存在せず、常に選択を強いられる」は 41 行目「またその店にも行かなければならない」、42 行目「延々と追い続けなければならぬ」とイコールになる表現である。よって e も正しい。正解は c と e である。

**その他の大学・学部の解答解説はコチラ！**

**増田塾 2019 解答速報ホームページ**

早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！